

大



幸せになるために、
人生に向き合う。

早稲田大学日本語教育研究センター

2011年春学期 考えるための日本語

大福グループ

2011年7月

自己紹介

アイス: 高井かおり



日本語教育研究科の高井かおりです。大学生の時議論好きの先輩が好きで、よく議論したことを思い出した。おしゃべりも楽しいけど、意見を戦わせる議論、あと静かな場所とベランダとお天気の良い休日の昼間ビールを飲むことが好き！



オレンジ: リュウウシン

中国から来たウシンです！日本語別科でとても楽しい一年間を過ごしてよかったと、心から感謝している～友情は最高！

あんこ: 横田侑助



スポーツ科学部4年の横田侑介(ゆうすけ)です！サッカー歴15年、未だに大好きで、今も顔が真っ黒です(;O;)笑よろしくお願いします♪



抹茶: 李天智



交換留学生の李天智です！日本のアニメやゲームが大好きで、戦国時代の歴史に詳しい。パソコンゲーム大好き。宗教は信じていないが、誰でも運命が存在していることを疑ったことはない.....という冗談をよく言います！やっぱり人生は努力の積み重ねによって変えられるものですね！

チョコ: 蘇郁潔



ダブルディグリー留学生として商学部で勉強している蘇郁潔です。食べ物が美味しい台湾から来た。よく暴食と言われているけど、料理がてんでへたくそ。インターネットから離れられない子～この3ヶ月の対話活動によって、人生の意義を改めて考えることができる。これからはもっと面白い人間を目指している。



イチゴ: チャンハートウ



人間科学部2年のハートウです。旅行大好きで、余裕あるときにダンスしたり料理作ったりします！



まえがき

私たちがこの文集のコンセプトに選んだのは、チーム名でもある「大福」という言葉です。日本、中国、台湾、ベトナムのメンバーが集まったこのチームで、「大福」という言葉はどの国でも使われている言葉であり、なんとなく縁起が良いから、という簡単な理由で決まったチーム名でした。ところが、良く良く考えてみると意外と深い意味があるんじゃないか、ということに気付いたんです。

大福というとあんこ味が主流ですが、今ではクリームが入っているものや、イチゴが入っているものまで様々。でも、中身があんこでもクリームでも、外見は同じです。中に何が入っているのかは、食べてみないとわかりません。誰かが美味しそうに大福をほおばっていても、もしかしたらその中身は、自分が嫌いな味かもしれない。

それって人生に似ているんじゃないか、と思ったんです。人の人生って、外から見ると楽しそうだったり、羨ましかったり。自分の人生より、あの人の人生の方が楽しいんじゃないか、と思うことがあるかもしれません。でも、実際にじっくり話を聞いてみると、その人なりの苦労があったり、努力があったり、でもやっぱり羨ましい部分もあったり、その人の人生には、その人の人生なりの“味”があるんですよね。

今回私たちが行ったのは、まさしく、その“味”を探す作業だったと思います。メンバー一人一人が、他のメンバーの人生を味見しながら、自分に合った大福（＝大きな幸せ）の“味”を探し出す作業でした。自分自身の幸せをみつけるために、必死に、人生に向き合いました。是非、ご覧頂ければと思います。

（横田侑介）





I	自己紹介	1
II	まえがき	2
III	もくじ	3
IV	レポート	
	りゅう うしん 劉宇新：言葉で世界を知る・考える・伝える	4
	す ゆ じえ 蘇郁潔：私は大人っぽいと思われたい？	1 1
	り てん ち 李天智：偶然性と人生	1 7
	よこ た ゆうすけ 横田侑介：私と愛国心について	
	～何を信じて生きていくのか～	2 5
	チャン ビエト ハートウ：私のなかのダンス。	3 0
	たか い 高井かおり：私が私らしくいられる場所	3 7
V	あとがき	4 4

1. はじめに

人は生まれて言葉の勉強を始めた。大きくなってから、言葉に対しての熱情はそれぞれ違うようになっていく。言語の勉強が好きのわたしは、小さいときから英語を勉強し始め、後は日本語学部にも入った。しかし、大学生になってから、自分が将来まで求めたいものはなんだろうと本気に考えると、今勉強していることと少しずれが出てきたような感じがした。つまり、「言葉」そのものを求めたいのではないと気づいた。

今、中国の多くの外国語大学は、「言葉の教育」を十分に重視しているが、言葉で何かを考え、何か具体的な分野の知識と結びつけて実用する方向への教育がすこし弱いと思う。確かに外国語大学では言語の勉強や研究が一番だが、しかし今中国の外国語専門の学生の中に、言葉の研究や教育を目的として勉強している人は一部分だけだ。そして、自分にとって四年間の勉強の意味をちゃんと考えずに、卒業後外国語とまったく関係のない仕事をする人もかなりいる。そのため、私は自分がどのようにして、将来の目標を大好きな言葉と結びつけて、自分のやりたいことをするのかについて、いろいろ考えた。

2. 将来のやりたいこと

まだ学校にいる私にとって、いきなり自分の「将来の答え」を考えるのは、非常に抽象的で難しいと思ったので、まずは自分の興味、「やると嬉しくなれる」ことから、簡単に考えてみた。

過去： 子どもの時から、新鮮なものが好き。テレビ・新聞・雑誌を見るのがなんとなくの趣味。小学・中学・高校は、人と交流するような活動に参加しやすい。

現在： 大学で、日本語学部の雑誌部、学校の学生記者団に参加し、いろいろな経験を得て、みんなと一緒に努力することを楽しんでいる。

外国語、外国文化、世界のことに興味がある。

美術が趣味。

子どもの時から、身のまわりの物事や人間関係を観察することが好きで、そして常識と違ったことを見つけたらすぐ「なぜか」を考えてみる。私たちの生活には、大量でさまざまな情報で溢れている。その中で意味のあること、あるいは関連性のあることを発見したり、分析したりすることは日々重要になっている。例えば、ジャーナリストにとって、職業の不可欠な要素には、観察力や洞察力があるのであろう。

今の自分は、身のまわりのこと・世界で起きていることが知りたい。日本語を勉強して今日本で留学しているおかげで、今の私は、自分の国以外のことにいろいろ接触し、たくさんの国の人と友達になったというようなことを通して、国際の視野が広くなり、異文化の交流も体験できた。これからの私は、知らなかったことを知りたくて、もう知っていることを伝えたいのだ。

今勉強している日本語と英語を生かし、メディア関係の仕事を目指して試してみたいと思う。例えば、国際関係のニュースの取材、中国と外国の交流活動、グローバル化の研究などをやる。同時に、新聞・雑誌の編集やデザインにも挑戦したいと思う。

更に深く考えれば、私は、自分と違うことを探りたい。特に思想や文化の違いによって、生活様式や行動も異なるといった点が面白いと思う。それから、「ほかの人と違う」を知ることによって、自分の独特さも分かるようになるのではないかと思った。

3. 対話活動

では、自分は本当にそのような考えを持っているのか。そして、ほかに何か理由や発想はあるのか。どうして自分は世界各国のことに興味があり、自分の国のことも伝えたいのか。クラスの皆さんからいろいろな良い意見をもらった同時に、対話活動も早めにやり始めた。

今回の対話活動の対象は、同じ寮に住んでいるロシア人の先輩である。いつも寮のキッチンで一緒にご飯を作り、話し合うことによって良い友達になった。彼女は日本語教育の専門で、日本語が上手のはもちろん、言葉に対する観点や見解も深く持っている。わたしより年上で、日本で暮らした時間もより長い。日本文化・生活、趣味、また人生の考えなどいろいろなことも交流や理解ができ、気の合う人である。

<対話活動>

① 言葉

先輩：劉さんのテーマ「言葉で世界を知る・伝える」、まず、この「言葉」というのは、どういう意味？

わたし：「自分の言葉」。

先輩：じゃ、どのような言葉なのか？「言葉」には、たくさんの形がある。声を出して話す「言葉」もあるし、文字という言葉、または頭の中でただ考える「言葉」もあるでしょう？ほかにもいろいろ。

わたし：ああ、そういえば、確かに。

先輩：「五感」を聞いたことある？

わたし：はい、五つの感覚のことですね。

先輩：そう、人の五感には、それぞれの「言葉」があると思う。あるものを「知る・伝える」ためには、触覚・視覚・味覚・嗅覚・聴覚を全部動かすのではないか。

わたし：ああ、そうですね。この前は、今まで勉強した外国語をいかすことだけ考えたのだ。そこまで深く考えたことはまだ無いですね。

・わたしの考え：

確かに、「言葉」という単語にはさまざまな意味が含まれているとは意識しなかった。例えば実際に世界中の国々の文化を知るとき、まずは「外国語で外国人と話す」と思い浮か

んだが、それだけではない。ジェスチャーも、表情も、音楽も、生活の習慣も、わたしはいろいろな知識などを実際に体験しながら、知りたいのである。「真理は実践から得られる」という中国の諺のように、わたしが知りたいそして伝えたいのは、ただ本に載せていることではない。

②世界を知る・伝えるのは、部屋で閉じ込めてもできる時代に入った(インターネットなど)。「外」に出るか、出ないか？

先輩：劉さんは世界を知りたい、伝えたい、それはどういうふうにするの？

わたし：(考え中)

先輩：なぜかという、部屋に座って、パソコンに向いて、知識とか出来事を調べたり送ったりする人もいますよね？

わたし：ああ、そうですね、確かに、

先輩：劉さんは？

わたし：わたしはそうではなくて、実際に体験したり交流したいです。自分の目で世界を見たい、それから……

先輩：やはりいろいろな違う方法があるよね

わたし：確かに！自分の方法、そしてどうしてこの方法がいいのかを考えてみる。

・わたしの考え：

一つの目標を達成するための方法や道は、いくつかもある。その中で、自分に合う方法を見つけて進むことも重要である。

③「考える」も必要！

先輩：テーマの「知る」と「伝える」の中に、「考える」を入れたら？

わたし：ふん～

先輩：ほら、まずは「知る」、

その後は、その知ったものに自分の思想を加えたり、今までの考えを補充したりする過程も大切じゃない？

わたし：ああ！なるほど。たぶんわたしを書いてあるこの「知る」の概念は、あまりにも広いかなあ。ちゃんと考えなければならないですね。

先輩：うん。まず「知る」、それから「考えて」自分のものになるよね、

わたし：はい

先輩：後は「伝える」よね。

・わたしの考え

「考える」という非常に重要な点を忘れたと気づいた。「知った」ことをそのまま「伝える」ではないので、やはりその間に、自分の理解で考え直して整理することは必要なつながりである。これを明確に表さなければならないと思う。

④「知る」「伝える」の本質は？

先輩：劉さんはなぜ「知りたい」のか？

わたし：ええと、自分は好奇心の強い人だと思う（笑）そして、知識を勉強したいという気持ちも強いですね。

先輩：じゃあ、どうして「伝えたい」の？

わたし：これは、自分が、ええと

「影響力」はすごいと思うからなのかな。

例えば、メディアは本当に強いものだと思います。「伝える」という具体的な形のない力で、人々の思想・価値観に影響をもたらしていますね！

もちろん、それぞれの発信者の立場によって、その情報の角度や出発点も違って

いる。
「正しいかどうか」という争議を一応置いといて、そういう伝える力が不思議だと思います。

先輩：そっかそっか。

じゃ、これは「考えられる」と「ほかの人を考えさせる」の反映ではないか？

わたし：ええ？考えられるというのは？

先輩：「知る」というのは、外部のことを受け入れることだと思う。

まず、例えばこの前知らなかったこと、または人の話を、「考えさせられた」のだ。

わたし：うん、

先輩：あと、自分で考える過程もあって、

わたし：はい

先輩：自分の思想が形成された。

わたし：新しい観点とかを見て、自分のもともとの一方的な認識を改善し、立体的な認識になるように、というような感じですね。

先輩：うん、その後、ほかの人を「考えさせる」

今回は、他人に「影響を与える」

・ わたしの考え：

他人 → 自分 → 他人

ここまで考えたことはなかった。しかし、確かに先輩の言ったとおり、人はまず外界から知識などの「刺激」を受け、自発的に考え直して自分なりの思想を築く。それから、自分の考えを外に伝える。

⑤では、何を

先輩：劉さん、小さいとき一番大きな夢は？

わたし：うん、小さいときは、テレビとか劇場の上に出るきれいな俳優や歌手のことが羨ま

しいですね。きれいな服を着て、美しい姿をアピールする人がすごいと思いました。小
学生のころは、学生に知識を教えたり、人生の方向を導く先生になりたかったです。

先輩：うん、で、今はどんな夢？

わたし：日本に来た前は、うちの大学でキャンパス記者、雑誌の編集者を担っていたのです。

やはり、これらのことに興味ありますね。将来は、メディア関係の仕事、例えば
ジャーナリストとか、編集者、またはアナウンサーとか（笑）

先輩：うんそっかそっか。

劉さんは小さいときから、「外見」「アピール」を重視しているね。

わたし：うん、そういえますね。確かに。

そして大きくなるとともに、「外見」だけじゃなくて、例えば先生のように、学生
に知識とか人生のことを伝えたい、というようなことに気づきました。

先輩：それは面白いね。

劉さんは小さいとき、例えば外見の美しさとか、アピールという表面のものが好き
だったが、大きくなると、その内面の深い意味などを探して、外と内を合わせて、
これからは「世界に伝える」よね。

わたし：あああ、そうですね！ここまで考えたことはないけど、確かにそういうことにす
ごく興味あるですよ。

先輩：じゃ、劉さんは今なにを一番知りたい、伝えたいのか？

わたし：今は、異文化のことですね。

異文化の誤解の解消、共通点を見つけるなど

先輩：外見＋知識、後は劉さんが専門家を目指しているよね！（笑う）

わたし：（笑う）そうですね！頑張ります！

3. 結論

外国語の学生は、外国の文化や社会などについてはよく知っていて、ほかの人よりは詳
しいとよく思われる。しかし、本当に「知っている」のか。

例えば、「日本人は礼儀正しい」

「日本武道の合気道には、勝負がない」

「日本の電車の中で、みんな静かで、隣の人と関係なくてしゃべらない」といったよう
な外国人が知っている日本事情。

しかし、日本人の「和」の精神、「他人のことを配慮する気持ち」などが分かるかどうか、
理解できるかどうかは、知識の勉強だけで断定できない。

このように、実は日本で実際に体験してはじめて、自分はたくさんの方がまだ知って
いないと感じたのである。やはり、テキストに書いてある文字や先生から教えられた知識
には、限界がある。自分の小さな生活の圏には、限界がある。

留学を通して、国際交流の興味深さや異文化交流の大切さを見つけた。今の世界では、文化の

誤解のせいで紛争が起こっている。異文化の誤解を解消するために、自分のことばで世界のことを知る・考える・伝えたいのだ。平和や友好の世界を築くために、限りのある力でも尽くしたいと思う。

これらの目標は今みれば、大きすぎるではないかと、自分もよく考えるが、しかし今から努力したい気持ちは持っている。

「世界を知る・考える・伝える」ために、さまざまな方法があるのであろう。その中で、わたしはメディアのことを選びたい。メディアは、人々に情報を伝えられる大きな力を持っているものだ、とわたしは思う。

特にわたしは、世界平和と友好の気持ちを伝えたい。今の留学のおかげで、さまざまな国からの人と出会い、この国際的環境の中で、みんな若者の間で共通している優しい心と、友好的な気持ちを実際に感じた。短い一年間だが、みんなは一緒に授業を受け、同じ国際問題について討論したこともあり、同じ日本にいたので日本のことも体験している。それぞれの国のことを聞いたり、自国のことも教えたりして、たくさんの方面からお互いに勉強になった。このような楽しい雰囲気や生活を、世界中の若者、また不愉快な国際関係をもっている国々の人に伝えたいのである。

このような影響力は、直接に人に命令を下すとか、精神上の約束だけではなく、潜在的で意識的に人の思想や行動を変えることができる力であろう。この点から考えてみれば、メディア通して人を影響することも恐ろしいではないかと思う。集める情報の正確さ、整理するときの方法、伝える内容また伝える時の角度や立場、メディアには、社会への責任感が必要で重いのである。確かに、これは難しい道である。そして、自分の知った、考えたことも世界万象の一部に限るかもしれない。しかし、この目標を目指して、やってみたいと今は考えている。

4. 終わりに

わたしは、初めてこのような授業の活動に参加したのである。普通は、初対面の人、友達までも心の中の感想とか悩みをシェアするチャンスは少ないが、ここのグループのみんなと仲良くなり、一緒に討論することは良かったと思う。やはり心の扉を開き、積極的に交流することは重要である。

皆さんのおかげで、この授業で、わたしの「自分発見」は前よりもう一歩大きく進めた。偏った考え方とか、まだ足りない部分など、今まで「まだ分らない自分」をみんなから教えてくれてよかった。

そして、将来の方向性をもっとはっきりさせたと感じた。人生の究極の意味を探し出すような偉いことを目指したのではないが、みんなは最後まで、自然になんとなく自分の人生を考え直したような気がした。

あともう一つ重要なのは、この授業で、自分のことを述べるだけではなく、相手の人生の考え・悩みもみんなと一緒に話した。お互いに助け合い、違う立場からアドバイスを与え、また人生の考えもでき、本当によかった。

わたしたち「大福」グループは、みんなほとんど「人間関係」「交流とコミュニケーション」に関心を持っている。人は一人で生きていない。この非常に大きな世界の中で、小さな

「わたし」はどのようなものを大切にしたいのか。この世界とどのようなつながりがあるのか。いつまでも、自分を信じて、有意義の人生を楽しむことを忘れてはいけないとわたしは思う。

最後に、グループの名前「大福」について話したいことがある。初めるとき、「大福」という名前を作ったグループメンバー自分も、偶然に言い出したのだと思うが、今学期の活動を経て、「終わりに」とか「感想」を考える時、ふりかえてみると、わたしたち六人のレポートにも、「大福」という意味にふさわしいではないかとみんなが思った。

みんなは人生の「福」を追求したい。ただ、人生の長い旅のなか、一つもう一つの途中の目的地に着くために一生懸命走るとき、幸せを求めるというもともとの人生目標をついに忘れてしまった人もかなりいるのであろう。

そのような時、足を止めて、道端の石に座って、静かに休みながら、今までの旅をふりかえし、これからの方向やルートをもう一度考え直すべきである。

たとえ一人で部屋でぼうとして、「わたしは何をしたいのか?」「今まではどんなことをしたのか?」を思うことも、今このクラスのように、みんなで一緒に自分のことを考えたり話したりすることも、人生の旅にとって、大切なことだとわたしは思う。

というわけで、「大福」のみなさんは、ここで一緒に幸せを求めることを考え、これからも、いつも今の気持ちを忘れないで、人生の旅を真面目に一步一步歩み、楽しもう。



テーマ：私は大人っぽいと思われたい？

一．動機

私は今年4月から、日本に来て、留学が始まった。以前、日本に旅行したことがあるけれど、そこまで文化の相違を気づいていなかったのだ。今回、ちゃんと日本で人間観察をしたら、あるところは従来のイメージと一緒に、あるところはまったく違うと思う。

一つのは日本人の女の子。やはり、日本人の女の子は、私が考えているイメージのようにおしゃれだ。渋谷や原宿に買い物に行って、おしゃれな「お姉さん」をいっぱい見ると、すぐ自分のかっこうがださくて、子供っぽいと思ってしまう。こういう感情を消したいなら、洋服屋さんですてきな洋服を買えばいい。けれど、どうしても女の子らしい服を着る勇気がない。気になる服を手にとっても、「かわいいけど、絶対着られない！」と思いながら、置いてしまう。私にとって、服を買うのは本当に難しい。日本の洋服屋さんには「私らしい」服が少ないから。ちなみに、いわゆる「私らしい服」って一体どんな服かと言うと、「いたずらな少年」、と自分ではそう思っている。いつも子供っぽい服を着ていて、22歳なのに、18歳と思われる場合も多い。やっぱり22歳の女の子に見えるようになるまでの道は非常に遠い。

実は、私はスカートなどの女の子らしい格好をしなくて、化粧品さえ持っていない女の子だ。それは、小さいころから、男の子のような立ち居振る舞いや言葉遣いをずっとしてきたから。また、女子高出身だったから、男の子っぽい格好が自立していて、かっこういいというイメージがあると思っていたんだ。そういう考え方は、もし台湾にいれば、全然珍しくないと思う。でも、日本に来て、多くの女の子が一番かわいい姿を見せるために、きれいに化粧したり、おしゃれで、大人っぽくしたりしていると知った。彼女たちを見ると、“私は変な女の子じゃない？”と、いつもそういうふうを考えていて、ちょっとおしゃれな人間になりたくなった。けれども、自分の女の子らしい姿を見たら、引くほど嫌な感じがして（理由はわからない）、結局自分のスタイルを変えられない。

それは、「悪くないじゃん！」と言われているけど、私は欠点があると思っている。その欠点とは、私はほかの人に「少女または子供だ」と思われてしまうことだろう。年上の人からはたぶん、「若く見えるってすごくいいと思ってるよ！」という意見が出るかもしれない。確かに、10年後だったら悪くないと思うけど。なぜ「欠点」だと思ってるかと言うと、やはり一般的な人は、ある人の外見を見ると、あるイメージが生まれてしまうんだろう。そのイメージが強いから、その後、長い時間付き合わなければ、その人のことがよくわからないに違いないと思っている。私に会ったらすぐわかる、私の顔は若く見えるし、大人っぽくない服を着ているし、知らない人に「子供」だと思われてしまう。あまり私のことを頼りにしてくれなかったり、何か間違えたら、すぐ「さすが子供だ！」という悪口

を言われたりして、面倒くさい事が今までたくさんあった。別に自分ではそのままでいいと思っているけど、やっぱり人間関係や社交的な活動をうまく進めるようになるために、イメージが一番大切なものだとも思う。少しずつしか変えられないだろうし、顔はまず変えられないから、格好から変えようと思う。

自分の格好について、私は一体どういうふうに考えているのかな？子供時代と女子高の経験が自分にどんな影響を与えたかな？また、簡単に自分のことを変えるのも難しくて、重大な決定だと思うため、もしいままでの自分を変えたいなら、どのぐらい変化をしたいのか？最後に、どうやってそういう自分を乗り越え、年齢通りに見える女性になるかな？といったいろいろな疑問を理解できるようになって、私なりの結論を見つけようと思う。

よろしくおねがいします。

二. 対話

***私は男っぽくて、子供に見えることに悩んでいる。**

そろそろ外見のイメージを変えるのか？

私：

私は、小さいころから、背がみんなより低かったけど、そこまで困っちゃったことや誤解されたことはあまりなかった。

高校時代に女子高に通っていた私は、自分が男っぽいと思っていた。なぜかというと、髪の毛をぱっさり男の子のように切っただけじゃなく、歩くとき姿勢や動きなどすごく醜かった。汚い言葉を連発したり、先生の話も聞かなかったりしていた。「スさんかわいいね！」という話なんてあまり言われたことがなかった。みんなの心の中で、私は一体どんな女子高校生と思われていたのかよくわからなかったけど、「お前かっこいい！ウけるわ！」という評価をもらったことが少なくなかった。とにかく、その時の自分が好きだった。

大学に入ったら、最初からみんなはまだ高校生のように大学で元気に走り回っていたから、私も自然にそんな雰囲気楽しんでいて、気楽であった。でも、大学は共学なので、私はもうかっこいい子じゃなかった、普通の女の子のように愛されなくなってきた。

けど、その気楽な雰囲気がいつの間に変わってきた。その理由は、周りの人々が変わったからだろう。女の子が大人になり、人に「私はもう大人になったよ！」というメッセージを伝えているように、ハイヒールをはいたり、肩を見せるぐらいセクシーなかっこうをしたりしてきたんだ。三年、四年生になっても、知らない人に「新入生ですか？」と聞かれるということに、困る気持ちはだんだん出てきた。年下だけど、見た目が私より大人っぽい女の子が、学校にどんどん多くなってきたから、自分もどんどん自信がなくなってきたんだ。

ちょっと頑張って、彼女らのようなかっこうをすれば、もっと22歳の女の子に見える

かもしれないということが分かっているけど、洋服屋さんに入ったら、やはり大人っぽく見える洋服が着られないと気付いたんだ。だから、私はいままで、ずっと変わってない。みんなに「気にしないで！子供っぽいならかわいいじゃん？」と言われるかもしれないけど、「かわいく見える」ってどういうことを示しているのか？私の性格も見た目のようにかわいいのか？そう思わないけど、言われれば言われるほど、見せる性格もいつの間にか少し「みんなが考えているようなかわいい女の子」に変わって行っちゃったんだ。楽しそうな笑顔で人にあいさつしたり、好きな人に、完全に別の性格を見せたりする。私は、他の人の気に入るようにしているのか？前よりもっと子供っぽくなっちゃったのか？あるいは、私はもともと子供なのか？この世に生きているうちに、自分を見失なっちゃった気がする。

友人のAさん：

こういうことからみると、外見を変えるべきことと気付いたきっかけは男の子がいるということなのか？女の子はそれぞれタイプがあり、どんな女の子でも男の子に好まれる。スさんは大人っぽい女の子になりたい理由は、ただ好きな男の子の好みに合うようになりたいのか？そうじゃなければ、一体なぜなのか？「かわいく見える」と「かわいい性格」とは違うことになれるかもしれない。かわいい見える人は、中身も子供っぽいとは限らず、自分らしくあればよいと考えればいいだけかもしれない。

***若く見えれば、人に頼れなさそうだと思っている。**

私：

外見が気になるようになったきっかけは、共学になったからかもしれないけど、一番大切な理由はただ人に「スさんが若く見えるよ！」といってほしくないことだ。別に大人っぽくて、セクシーな女の子になりたくないけど、もう少し大人っぽくなったら、（例えば、ファッション雑誌にのっているような服装をしたい。）こういう評価が少し減ってくるかもしれない。

二、三年前に、ある私のようにベビーフェースの女の子に「ベビーフェースの人はよく人に羨ましがられるけど、社会に出たら、仕事をやっているときに、ほかの人に子供っぽいと思われちゃうので、頼りにされなくて、信じてもらえないこともあるよ！すごく困っちゃう！自分自身の経験だけど。」と言われた。

私もこういうことに気付いた。私がサークルや学科などのイベントを主催したときに、ほかの人より頑張ってやったけど、なぜみんなが私の指示に従ってくれなかったのか？なぜみんなが私の意見を聞いてくれなかったのか？なぜ自分がやりたくないことを勝手に私に投げたのか？

友人の A さん：

人が信じてくれないってあなたは言う。一体なんだって言うの？人のあなたに対する態度はあなたが人に与える感じ次第で変わると思う。あなたの周りの人は決してわざとそんなふうにいるんじゃないよ！ただ人の外見だけでその人の人柄を判断したりはできないよ。私だってそう。

私：

さっきはまだ答えてなかった。可愛い女の子って第一印象も悪くないって気づいたから。割と簡単に人と仲良くなれるし。ゆっくりとだけ自分の女の子の部分、可愛いらしい自分にも慣れてきた。今の私は私じゃない(高校の時の私と違う)と思うけど、それは実際は自分が既に変わっていることに気づいていないだけなのかもしれない。でも最近のことを考えると、友達にくそ真面目なイメージを持って欲しくないからなのかもしれない。何かしら特別なことでも起きない限りは、ずっと可愛い女の子ってイメージで友達や初対面の人と関わってく方が気楽で楽しいだろうし。

人が信じてくれないだけでなく、誤解されることもある。例えば、私が何か失敗すると、仲の良い友達でさえ「やっぱり子供だね！」ってまず言うてくる。もし私の不注意での失敗だったら誤りを認めるけど、私の外見を持ち出すのは単なる私自身への非難だよ。私は自分では性格も子供っぽくは無いし、可愛くも無いと思っている。さっき言った通り、ただ単に私の見た目から皆が自然とそう思ってしまうだけなんだ。

友人の A さん：

心はとても大事だ。見た目には心の持ちようが表れる。小さな子供のような見た目の俳優は、演じられる役が限られる。だったら、そんな人たちはどうやって自分を変えているのだろう？俳優にとって顔は商売道具だ。もしも見た目の子供っぽさが演じられる役を少なくしたりしたら、仕事が無くなって、俳優としてやっていけなくなるかもしれない。そこで、そのような人はファンからの印象を変えるために、自ら可愛さからかけ離れた役柄への挑戦をすることがある。でも、私たちはどうやったって俳優やスターにはなれないし、自分を変える努力をしても気にしてくれる暇な人はいないかもしれない。それでも、本当に自分を大人っぽくしたいならば、心の持ちようをそんなふうに変えさえすれば、それで良いはずだ。たとえ見た目がどんなに子供っぽくて、高校生にさえ見えるようなお母さんがいても、彼女が子供のために、自分を顧みないで頑張るところを見たら、きっと彼女の見た目を理由に母親らしくないとは思わないだろう。

*大人っぽく私はどこにいるのか？

私：

そうだね！でも、私はまだ完全に自立した大人っぽい自分を見せられないんだ。一人でいるときだけ「一人でもできる」っていう気持ちが現れて来るから。たとえ文句を言いながらも、結局精一杯頑張ってやるべきことはやる。でも、実は、私は自分の心と体は思っているほど強くないことに気付いた。逆にとても傷つきやすくて、自分を安心させるために、自分を守るために、強く見られなくて、ひ弱に見られたくない。それは、私が女の子らしい服をあまり着なくて、可愛い格好をしない理由だろう。でも、人に面倒をかけたくないから、助けて欲しく無いと思えば、強気なところを見せる。例えば女の子の前で重い物を持つ時、女の子には助けられたく無い！だからどれだけ重くても何の問題も無いように見せなければいけない。でも男の前で、その人が私を助けることができそうだったら、強く装うことは無いかもしれない。

だけど、今になっても精神的に大人になるってのが具体的にどういうことなのか分からない。何事もよく考えること？年長の人みたいにタイミング良く人を気遣えること？それとも馬鹿げた、衝動的な行動をしないこと？でも、もし振る舞いをきちんとすることに気を取られてばかりいたら、がんじがらめになっているみたいで苦しい。だからそんな改まった場所じゃなければ、自分の挙動を縛り付けるのは好きじゃない。私は実際、せっかちで根気が無いし、何かやりたいことがあればやっちゃうし、欲しいものがあれば買っちゃうし、あんまり躊躇することは無い。そんなところが私の個性だと思う。考えが足りないと思われているかもしれない！それに、すぐに嫌な考えが出て来る。人に嫌われたく無い。だから結構尻込みしたりする。人にあんまり寛大になれなかったりするの、精神的に成熟してないって感じる理由の一つかもしれない。

とにかく、全部自分が人にそんな感じを与えているからなんだ。たとえ私の考えは子供っぽくなくても、見た目から無力な子供と見られる。着るものを変えるだけじゃなく、態度や雰囲気なども変えて行かなくちゃならない。これはきっと社会で経験を積んでやっと達成できるんだと思う。変われたら変われたで、その自分を好きになれるかはわからないけど。

友人のAさん：

個性なんて何の問題でもない！誰でもその人なりの短所はあるけど、見方を変えれば短所とは限らないし、何でも自分なりのやり方でやるのが1番いい。ただ後悔さえしなければ。それと、人の期待に応えるために、本来の自分の個性を失うような必要は無いと思う。年齢や自分のしたいこともそれはそれ。人に好かれるような人になりたいっていうのもそんなに大したことじゃない。自分なりのやり方でいても、自然と惹かれる人はいるはず。それだったら自由に生きられるし。

*とにかく、やはり他の人が私のことをどういうふうに思っているのを気にしすぎる。自分らしく生きていく人間なのに、変えることはない。今の欠点だけ直してみれば、外見に関係なく、絶対もっと頼れそうになるかもしてないよね。

三. 結論

今までの考えは、おそらく自信が足りないということのせいだと思います。

なぜかという、実は小学校1～4年の時に、私は人に好かれなかった。わざとクラスメートを傷つけたわけじゃなかった、ただ冗談でクラスメートの弱点についてたくさん悪口を言っていて、結局クラスメートの心を傷つけてしまった。よく先生に「クラスメートに悪口を言わないでください!」と言われていた。でも、小さい時の私にとって、一体どんな話は悪口なのかよくわからなかった。そんな私には、友達なんてほぼいなくて、あまり人に好かれなかったのも当たり前のことだった。

4、5年生になったら、ようやく自分がいつも考えずに、口に出しちゃうことに気付いた。それから、「ちゃんと考えてたら、言う。」という考えがずっと頭の中で残っていた。5年生から、その結果、友達が増えてきて、楽しく過ごしていた。でも、時々考えすぎて、自分が言いたいことを言えなくなってしまった。小学校のよくない思い出の影響のせいで、「自分の意見があまりよくないと思う。」や「たぶん人に好かれてない。」といったネガティブに考えていて、自信を持ってない人間になってしまった。

自信をつけるために、よく自分を励ましたり、他の人を気にし過ぎなかったりすれば、自信がついて何もかもうまくできて、人に褒められて、もっと自信を持ってくるだろう。それから、自信が少しずつ増えて、人に頼らなくて、自分で自分のことを決めて、自分らしく生きていけるはずだ。また、自分のことをちゃんと扱えば、人に頼れる人間と思われるはずだ。

かわいい服を着られない自分も、子供に見える自分も、いきなり大人っぽく考えている自分も、すべて「私」じゃないのか。もともと建前が好きじゃない人間なので、これから一般的な22歳の女の子らしく変えていくと、自分も失ってしまうだろう。どうせ他の人のために生きている人間じゃあるまいし、たとえ人に誤解されても、自分が信じている方向へかたく歩いていくべきだと考え直した。



李天智

1A119035-5

テーマ：偶然性と人生

個人の経験では、今の時点で今までの人生を振りかえてみると、いろいろな偶然なことが混ざって、さまざまな偶然のことに巻き込まれたという感じがします。そして、もし昔の自分に今の自分を見せるとびっくりさせるだろうと思います。ちょっと偶然性いっぱいの自分史を紹介いたします。幼稚園と小学校の時は一人前の科学者になるという大きな夢を持っていたが、運が悪かったというか、中学校受験の時に理系の強い中学校に受からなくて、文系に強い中学校に受かりました。（別に受かる難易度は大体同じでした。）高校受験の時も両親と先生たちに説得されてリスクを避けるために同じ高校に推薦で受かりました。ここまでは幼いころの「理系玄人」になる夢とはずいぶん違ったが、実は私の数学・物理などの科目は常に学年トップの成績をとりました。そして大学受験の時は文系の一番強い北京大学を目指して一所懸命勉強していました。そして、うちの高校は毎年推薦で北京大学・清華大学に進学するチャンスがありますが、推薦で受かるという方法はやっぱり一番リスクの低い最高の選択肢だと思ったが、私が卒業した年に一学年上の先輩はなんか悪いことをしちゃったような理由でうちの高校と北京大学の間に不快なことが起きて結局北京大学に行けなくなってしまいました。そういうことで理系の強い清華大学の文系に入りました。どうして「日本語文学」という専攻に入ったかということ、趣味か進路かを考えたかというより、やっぱり推薦申請表を記入したときにちょっとこの間アニメをいっぱい見たから本の2、3分ぐらいで決めたことという偶然なことでした

が、高校生の自分に対して専攻ということは何だかさえさっぱりでした。

ずいぶん長い話ですみませんが、歴史上の偉人達に比べると別に面白く挫折・逆転の多い自分史ではないに決まっているが、大学に入った後もこれからの人生も自分の考えの通りと違って予測のできないしかも必然ではない偶然なものと出会うことになるでしょう。人生は織り糸で織られているが、いろんな色の糸が混じっています。結局自分だけでなく、運命様もその人生の織り糸を織っていくこととなりました。そういう偶然性にどう向き合うべきかという、自分もいろいろ後悔したり悩んだり乗り越えたりしたことがありました。みなさんも歴史に名を残る偉人たちもそうだと思います。避けてはならない思った通りに進むはずではない人生の偶然性をどう向き合えばいいかという自分が深くかかわっている課題を今から本気で考えていきたいと思います。

対話活動

対象：お母さん

① 人生と偶然性

A：どうして人生は偶然性とつながりがあるか？

B：今までの人生の中、予想とおりに進んでいなかったという感じがして、Aさんが知っているように、中学校のときに私は理系に進学したかったが、何らかの理由で文系を選んだが、高校のときにもふとしたはずみで憧れている北京大学に進学できなかったから、偶然とはいえないか？

A：確かに今の状況はあなたが中学校・高校時代に思っていたこととは多少違うが、人生の道というものはあくまでも自分が選んだじゃないか。本当に理系に進みたいなら推薦をあきらめて自分で高校入学試験を受ける道はあるだろう。

そして、北京大学を目指したら推薦のほかには大学入学試験という方法はあるじゃないか。リスクを避けるためにあんまりすきではない道を選らんだら逆に楽にはならないだろう。

B：それはそうなんだけど、自分で試験を受けたら万が一受からなかったらあんまりよくない大学に進むしかないだろう。人生というものは選択の積み重ねだから、当時の現実を踏まえて最優な選択をしたほうが一番かしこいと思っている。だから、人生は「自分で道を決める」だけじゃなくて、「限られている選択しの中に最優と思っている判断を出すことから構成される道」と考えられるではないか。つまり、人生は自分で勝手に決められないものであって運命の中に含まれているものといえるだろう。

A：しかし、人生はあくまでも客観的なものではなくて、あらかじめ運命に決められたわけではないだろう。ちゃんと自分の目標を目指してがんばればいろんなことが実現できる。これは絶対に偶然なんかじゃない。

自分の感想：

よく「偶然だなあ」という言葉を口に出すと今までは気づいていないが、確かに自分はこういう癖があると思う。その理由を探ると、やはり人生に対する一種の無念さが含まれているが、消極的な態度をとっているとは思わない。しかし、こういう態度は本当にいいなのかはよくわからない。

② 偶然性は言い訳か

B：まあ、努力の甲斐を否定する気はないけど、人生には努力しても夢を現実にかかわらないことがいっぱいあるよ。たとえば、私のような人は絶対に主席にならないだろう。これは別に努力しているかどうかという問題じゃなくて、運命

に決められたことだよ。

A: 13億人の頭になるという夢は確かに現実的ではないという色合いが濃いけど、それをもって努力の意義を否定して運命論を主張することはまったく説得力がないだろう。

B: 別に運命論なんかじゃないけど、ただ人生の道はよく偶然なことに左右されると感慨したいだけだ。

A: 絶対に客観的環境に左右されない人間はいないが、弱い人間より自分の人生をちゃんとコントロールできる人間もいるだろう。

B: しかし、私の今までの人生からみればコントロールはできていない気がする。

A: だから逃げたいだろう。偶然性に必然性が含まれている。これは人生にたいしての態度ということ。自分の力を信じて、自分の意思を貫いて努力し続ける人は偶然性なんて、言わないだろう。このような言い訳をやめて現実に従って努力することこそがよりかしこうではないか。

自分の感想：

個人的な考えだけど、偶然性だということはそもそもがんばらなくてもいいという消極的な態度のためのいいわけではないと思う。それは客観的環境に左右される人生に対する一種の感慨に過ぎなくて、人生の無常の悲しさを乗り越える考え方であると思う。正直に言うと、何でも偶然だという考え方をとると確かに自分の向上心が失ってダメ人間になる恐れがあるが、そのようなことをよけるために常に自分自身を励ます必要があると考えている。

③ 偶然性への態度

B: だったらもういっただろう。運命論を主張したいから偶然性を取り上げるわ

けじゃなくて、自分の経験のようにがんばっても客観的環境にしか従わない人生の悲しさを話したいだけだよ。ちょっとだけくいが残っているいままでの人生にたいして「偶然」という言葉でけりをつけて、過去に絞られないように将来を前向きに向き合うということができるのではないかと思っている。

A：まあ、そう考えればそれでいいんじゃない。しかし、あなたはよくこれからはがんばろうぜと言ったが、結局ぜんぜんがんばらなくて目標を実現できなかっただろう。

B：それは努力と遊びの間のバランスの問題だけど、まあ、たしかに反省する必要があるかもしれない。

A：だから、自分はいったい何がしたいという質問をちゃんと考えて、そしてその目標に向かってがんばれば偶然ではない人生ができるだろう。

B：うん、わかった。じゃがんばろうぜ。

自分の感想：

よく自分の今までの人生に振り替えてみると、確かに過去の失敗を反省せずにまた同じミスをしてしまったことが多いから、「偶然性」を言い訳として自分のミスをごまかそうとしたことはないとはいえない。そこはちゃんと反省する必要がある。

④ 人生に対する積極的態度と運命論

A：まあ、あなたを叱る気がないけど。人生には偶然性がいっぱいあるという考え方はあくまでも一種の人生に対する態度だと思う。これ自体はなんの悪さもないけど、ちょっと消極的に見えるだけだ。それについてちょっとあなたの意見も聞かせてもらいたいね。

B：確かに同じことであっても人によって違う態度をとることは普通だが、人生の偶然性を認めると消極的な態度をとっているとは賛成できない。前にも言ったように、人生には自分勝手に決められない。まったく自分の興味に基づいて人生の十字路で面白そうな道を選択したら後で後悔する可能性も大きいから、一定の妥協は必要ではないかと思う。こんな時に多少自分は気が済まないけど、運命に従わなければならないだろう。そして、このようなことに対してとるべき態度はまさに「現実を踏まえて素直に認めて、これからはちゃんとがんばる」だから、それはすべて偶然だという考え方は消極的ではなくて、むしろ過去を乗り越えてくれる積極的な考え方だと考えている。要するに、人生に対するとるべき態度は確かに「積極的、前向きに物事を考える」ということだが、運命論は絶対的にその反面に立つわけではないと思う。

A：まあ、一理があるようだね。運命論って自分を励ますためのことだったらわるくもないみたいだ。ようするに、ちゃんと今まで、これからのさまざまな出来事に対してどんな態度がとるべきか考えておいたらそれでいいんだ。

自分の感想：

要するに、「運命論」という考え方は絶対的に悪いとはいえないが、よく「偶然」「偶然」と言うと、自分の人生を消極的な道に導く可能性も否定できないから、十分な注意も必要である。

結論

会話活動とグループディスカッションに通じて、最初は自分はどうして「人生と偶然性」というテーマを選んだかということにたいする理解が深めた。だれ

の人生でもなんのくいも残さずに順風満帆に進むわけがないから、どうやって自分の過去におけるやむを得ずにした選択、あるいはあまり満足していない出来事に対してどんな態度をとるべきかということは誰にとっても避けては通れないことだと思います。これについて、自分自身のよくとる態度は「運命論」だとわかりました。どうして自分はよく「偶然」という考えをするかといと、やはりがんばらなかったら失敗したり、勇気がないから結局くいが残ってしまったりすることを心の中に認めるとずいぶん挫折感を感じてストレスがたまるので、徐々にこのようなことを自分のせいと認めずに無視してしまう傾向に向かいました。

その考え方自体は確かに多少消極的に見えるが、自分の能力に対して自信を持ってこれからの人生を前向きに立ち向かうために、余計な挫折感を避けなければならないのではないかと思います。私はちょっとパーフェクト主義ですから、「自分は能力がない」、「誤った選択をした」などのことを自覚したらその挫折感・無力感は必ず自分に大きな打撃を与えて自信が揺らぐことになりますので、運命論は多少助けてくれた気がします。

人生の目的はなんだかという、物的な豊かさではなく、精神的な満足感だと個人的に考えています。そして、その目標を達成するために、物的な豊かさができるための努力は不可欠である一方、挫折・失敗・後悔などの感情から抜き出してできるだけ楽しい生活を送ることが期待されるではないですか。人は何年か分が煙になって消えてしまうものですから、運が悪ければ自分の生き方が全否定されたような感覚に陥ることは一番望ましくないですね。

ようするに、人生におけるさまざまな思い通りになっていないことを「人生の偶然性」に責めを帰することはダメ人間の考え方というより、もはや自分を挫折感から解放する自己暗示だといえるのではないかと思います。

終わりに

この前に経験したことのない活動を通して、いろいろ勉強になりました。感想はいっぱいありますが、以下のように述べます。まず、この機会ですぐ考えてもいない自己発見ができました。自分の未来・過去・現在にかかわりのあるテーマを考えてくださいと先生に言われた時にはどうして「偶然性」という言葉を思い浮かべましたかとよくわかりませんでした。何週間のグループディスカッションと会話活動を通して、だんだん自分の心の中で秘めていることが見られるようになりました——よく「偶然」「運命」を言い訳として過去の失敗の記憶をごまかそうとして挫折から抜け出そうとしている自分を発見した。得たことはそれに関するよしあしではなくて、その自己発見の過程といろいろ考えたことのおかげでこれから失敗・挫折をどう向き合うか、将来はどうすべきということがわかるようになった感じがしました。次に、大福の皆さんと話し合った時はとても楽しくて、同じ物事に対して他人の考え方と自分の考え方の違いと共感を覚えることを通して、他人の立場に立って考えることもだんだんできるようになった気がします。最後に、グループディスカッションを通じて、みんな共通の悩みやしたいこともいろいろ見つかりました。他の人と同じことを考えていることを気づくことはなんと楽しいです。ようするに、この活動はとても有意義で、きっと私の記憶につよく残ります。



私と愛国心について
～何を信じて生きていくのか～

スポーツ科学部スポーツ文化学科 4 年

1K08B234-1 横田侑介

日本人と愛国心。これは自分自身長年ずっと考えてきたことだし、約 1 年間に渡る就職活動を通して考えてきたテーマ。日本人は愛国心がないと良く言われるが、「日本人は愛国心がない」と言われて育ってきたから、そういう風に思っているだけなのではないだろうか。その割には、日本人はなかなか海外に出て行けずグローバル化の潮流の中で苦しんでいる。それは日本人が日本を好きだからではなく、単に日本人が臆病で外に出ていけないだけなのだろうか？

オサマ・ビンラディン殺害のニュースを聞いて、グラウンドゼロの周辺で星条旗を振りまわすアメリカ人たちを見て、これは日本では考えられない光景だと感じた。例えそれが敵討ちであろうとも、少なくとも私が生きてきた日本という国では誰かが死んだときに国旗を振りまわして大喜びしたりはしない。戦時中、あるいは江戸時代にはそういうこともあったかもしれないが、今の時代には考えられないことである。とはいえ、単に日の丸も君が代も好きではないという理由もあるかもしれないけれど・・・。

私は幼い頃から 10 年以上サッカーをやってきて、今では実際にプレーするよりも観戦する機会の方が多いのだけれど、日本代表、あるいは日本人選手が海外で活躍している姿を観ていると胸が躍る思いがする。これぞ紛れもない愛国心であると思うのだけれど、サッカーというものを外して考えた時に、自分の中に日本という国に対しての愛国心があるかと問われれば疑問である。普段生活をしている中で、自分は日本人であるかどうかとか、日本人としての誇りを持つとう、とは思わない。とは言っても、別に日本を出て行きたいとも思わないし、日本という国が嫌いなわけでもない。

つまるところ、私を含め、日本人は他の国のことを知らないだけなのではないか。島国だからなのかどうかかわからないが、そもそも日本人は海外に出て行きたがらない。比較のしようがないから、日本が良い国なのか、自分が愛せる国なのかどうか決めかねている。それでいて海外からの情報や文化はどんどん入ってくるから、そのうちに海外に対しての憧れが強くなり日本に愛着が持てなくなる。そういった理由で、日本人は自分が生きている日本という国がどういう国なのか、自分たちが日本人としてどういうメンタリティや考えを持っているのか、そういったことを考える機会がないだけなのではないか。

3.11 の震災の際、海外メディアからの評価に私を含む多くの日本人は戸惑ったのではな

いか。「この事態にも関わらず、想いやりの心を忘れない日本人は異常なほどに素晴らしい」そう海外のメディアはこぞって称賛してくれたけど、そんなの当たり前じゃないの？それがそんなに凄いことなの？というのが私の正直な感想だった。日本は世界から見れば異質な国なのだな、と改めて思ったし、日本が一体どういう国なのか、日本人が考え直す良い機会だと感じている。

以下、友人 T との対話

■愛国心はある??■

●対話●

私：T は、愛国心はある？

T：あるよ。

私：どんな風に？

T：1つ、ポジティブな理由を挙げるとすれば、昔から組織とか団体とか、自分が所属してきたものに愛着がある、っていう単純な理由。ネガティブな理由としては、俺、海外に行ったことがない。

私：海外に行ったことがないから、日本が好きってこと？

T：まあそうやね。

私：でもさ、海外に行ったことがないからこそ、っていうか、知らないからこそ、好きになれない、っていうの？T は佐世保から東京に出てきてるわけじゃん。佐世保に居た頃は別に佐世保のこと好きになれなかったかもしれないけど、東京に出てきてからの方が佐世保のこと好きになったとか、そういうのはないの？

T：それは確かにそうだね。東京に出てきて思ったのは、当たり前だけど、佐世保は緑が多いし、食べ物美味しいし、水が美味しい。静かで、ドライブしやすいかな。

私：でもそれって、“佐世保だから” ってわけじゃないよね？

T：そうだね。そう言われると・・・まあ単純に、自分が生まれて過ごした町だからっていうぐらいの理由だと思う。さっき愛国心があるって言ったのもそう。単純に自分が生まれた国だから。

私：じゃあ、佐世保と東京とどっちが好きなの？

T：東京だね。

私：東京なの！？

T：うん。(笑)老後はごちゃごちゃしてて嫌になるかもしれないけど、今は若いし、東京に居れば遊びに行くにも服を買いに行くにも便利だし、飽きない。福岡に居たら天神しか遊ぶ場所がないけど、東京に居れば新宿にも渋谷にも池袋にも六本木にもどこにでも行ける。それはこっち出てきて一番驚いたところかもしれない。とにかく飽きない。後は、海外に旅行しようと思ったらアクセスが便利だし。

私：比較した結果、東京のが良いってことだね？

T：うん、そうだね。

私：じゃあ、もし韓国に遊び行って韓国のが良い、と思ったら韓国に住む？

T：そうだね。東京出てくる前は東京の方が好きになるなんて思ってなかったし。もしほかの国に住んでそっちの方が楽しいと思ったら、そっちに住んじゃうかも。

●感想●

“愛国心”という言葉を変義し直さなければならないと感じた。私が知りたかった“愛国心”というものは、自分が愛する国のために頑張れるか、ということであり、自分が生まれた国を愛せるか、ということではない。この会話の中で T は、日本も、佐世保も、自分が生まれ育った国や町だから好きだけど、何か他に特別な理由があるわけではない、と語っている。もし他の国や町に移動してそこを愛することが出来れば、そこに住む可能性も否定出来ないのだ。それに関しては私も同じことを感じたし、それは私が思っている“愛国心”とは違ふ。

■日本人らしさって何？■

●対話●

私：日本人らしさを感じる瞬間とかつてある？

T：あー、昨日飲み会だったんだけど、6個入りの餃子を最後1つ残しちゃう、遠慮しちゃうところとか、そういうところは日本人っぽいところなのかなと思ったりしたけど。

私：そういう日本人らしさを見てどう思う？

T：んー、やっぱりなんか日本人って決められないというか。思い切りのなさが見える。結婚とか、人生における重要な分岐点に立ったときに決められない。重要な場面で優柔不断。でもアメリカ人とか離婚多いし、慎重さは良くも悪くもあるんだけど。

私：地震があったとき、日本と海外の違い、みたいなことって何か感じた？

T：日本人は和を重んじている。チームワークがあるというか。

私：それに関してはどう思う？

T：俺は好きだけど。自分自身ずっとスポーツをやってきた人間だから、チームワークとか、そういうものが凄く重要だと感じている。

●感想●

私も T と同じ意見で、日本人らしさは良くも悪くも協調性があることだと思う。集団行動をしていく中では協調性というのはやはり必要不可欠なものであるし、今回の地震の際にもそういった協調性が日本人の長所として取り上げられていた。逆に周囲の顔色を窺って自分の判断が出来ないことも多くあると感じるし、そういった部分は短所に上がると思う。どちらにせよ、T も私も、日本人の特徴を長所とも短所とも捉えており、一概にその性

格や気質を愛しているわけではない。

■何を信じて生きていくか■

●対話●

私：日本の幸福度ランキングが先進国中最下位なのは有名だけど、それについてどう思う？

T：自分は幸せだからなんとも・・・。

私：なんで幸せなの？

T：基本的な衣食住があれば幸せですね。

私：じゃあ、日本人の幸福度が低いのは、基本的な衣食住環境が整っていない人が多いからだと思う？それとも幸福のハードルが高いから？

T：ハードルが高いからだと思う。一戸建てに住んで車は二台持って、とか、そういうんじゃないと幸せを感じられなくなっている気がする。地震があつて思ったのは、家族とか近い友人とか、そういう人たちがみんな幸せであれば幸せなんじゃないかなって。日本人は多くを求め過ぎてる気がするね。

私：なるほどね。今話してて思ったけど、愛国心と宗教って似てる気がしない？日本にはそういうものがないっていうか。

T：確かにね。日本人には信じるものがないから闇雲に金持ちになることを幸せになる条件として掲げているのかも。海外の国には宗教とか信仰とかあるし、何かあったときは神様を信じれば救われると思っている。日本には、そういうものがない。だから今回みたいな地震があったときに、何を信じて良いのかわからないのかも。

私：じゃあTは何を信じてるの？

T：俺？俺は・・・自分自身かな。あとは、家族とか友達とか。それさえ信じていれば救われる気がするよ。

●感想●

愛国心と宗教って似ているな、と感じたのがこの対話の中で得た最も大きな気付きであった。私が求めていたのは、“何のためなら頑張れるのか”という問いに対しての答えだったのと感じた。愛国心はその解になり得たのだけれど、我々日本人にとっては、国のために頑張るという概念は非常に薄いものであると感じた。

◆結論◆

私が、日本人には愛国心がない、と言われていることに対して違和感や興味を抱いていたのは、愛国心というもののや、また日本という国に対しての興味ではなく、“何を信じて生きていくのか？”という問いに対する答えを求めていた、というのが最終的な感想である。ある読んだ本にも書いてあったことだが、日本の1900年前半は戦時中で、国のために命を捨てる覚悟を持つことが何よりも正義とされていた。戦争が終わった1900年代後半は、経

済的にアメリカに追いつくことが何よりも重要で、必死に働くことが生きていく上での道筋だった。

では、今はどうなのだろうか。高度経済成長期が過ぎ、バブル期が過ぎ、経済的な成長は最早飽和状態である。Tとの対話の中でもあったが、日本人の幸福のハードルは高くなり過ぎているのではないか。しかしながら、愛する国のためでもなく、信じる宗教もなければ、自分自身の経済的な発展が幸せの道標となってしまうのは当然のことに思う。

震災を経て、日本や、日本人がこれから何を追って生きて行くべきなのか、という議論が至るところでなされている。それは、私を含め、直接被災地に関わりのない人でも多くの人が死を間近に経験したからだと思う。就職活動中だった私はリクルートスーツに身を包んでビルの15階で揺れが収まるのをひたすら待っていたが、その時感じたのは内定が欲しい、などと言うことではなく、家族や、友人たちは大丈夫だろうか、ということだった。良く考えれば至って普通のことであるが、そういった普通のことに気付く良い機会にはなかったのだと思う。

もう今までの社会のルールに縛られて生きていく時代は終わりに向かうように感じる。自分で自分の人生を創っていくことが求められる時代がやってくると思う。その中で、愛国心も、宗教もないこの国で生きていく私は、自分自身を信じ、自分自身が信じた道を責任と覚悟の想いで生きていきたいと思う。

◆おわりに◆

自分と愛国心について、そして、これからの人生において自分が何に信念を置いて生活していくかを考えることは、1年間を通しての就職活動の締めくくりになった気がする。なにより、自分だけで考えるのではなく、グループのメンバー、しかも違った文化を持ったメンバーと話すことは非常に刺激的だった。一人の日本人として、あるいは、世界の内の一人の人間として、これからの日本、世界で、どのように生きていくのか、深く考えるきっかけになったし、これからもそういった機会をなるべく多くしていきたい。

そして同時に強く感じたのは、日本語は難しい。非常に抽象的な言語だし、文化としても、暗黙の了解というか、みなまで言わずとも理解しなくてはならないことが多い。日本語を用いて考え、伝えることの難しさを痛感した授業だった。



チャン ビェト ハートウ
人間科学部 環境学科 2年
学籍番基 1J10D266-8



テーマ 私のなかのダンス。

テーマの理由

私はどんな人間かという、何でもやりたい、何でも好きなタイプです。なので、興味をたくさん持っていて、いろんなことを試しにやったことがあります。その中は、中学生になってから今までずっと変わらない興味はダンスをやることです。そして私が好きなのは社交ダンスです。

社交ダンスの一番基本なところは、男女ペアを組んで、楽曲にあわせて、男性がリードで、考えた動きを女性に伝えて、二人で一緒に楽しむダンスです。その音楽に合わせて、自分が自由に動くという部分は私がこのダンスに最も気に入ったことです。リズムを体に刻み込めるし、同じ動作でも、いかに多くのヴァリエーションが作れるかをとても楽しめます。

また、社交ダンスはひとりでは踊れないから、そのためのルールが絶対に不可欠です。勝手に踊りまくっても上手いとは言えません。

男性のリードに女性は応えて、それに乗って踊る訳です。良く知った仲であろうと、全く見知らぬ仲であろうと、相手に不愉快な思いをさせず、心地よく踊ることは男女を問わず礼儀であります。

学校から帰り、友達と話をせず、パソコンもせず、映画も見ず、すぐ練習室にあわてて行ったという時代もありました。何にかな悩んだり、嬉しかったり、悲しかったり、怒っていたりしたときも、ダンスをやりました。そして、一旦踊り始めたら、不思議なことに、学校であったことなど、すべたがどこかに消えしまい、一つの「うれしい」と「わくわく」の気分になりました。

今の私が振り替えて考えると、その時の自分は、単にダンスするのを楽しんで、自分が感じる楽しさを表現したかったわけです。しかし、その「うれしい」を表現するとき、うれしいという気持ちの裏には、照れて、恥ずかしい気持ち、もしかしたら悲しみも含んでいるかもしれません。彩りあふれる「うれしい」が存在する感じがします。それをダンスで表現していました。感性豊かなダンスが生まれるのかもしれません。

練習すれば、当然なことは、「ここまでで来たらもう少し上を」、上に到達したら、もっと上を、と願ってしまうのが人間の持つ向上心です。それで自分の姿勢、見た目の美しさを最大限に引き出してくれるダンスは、本当に一生続けられる趣味だと私は考えます。

対話報告

今回私は対話報告の相手として選んだ人は自分の同じマンションに住んでいるルームメイトの女の人（Aさん）にしました。私は彼女に知り合ってから3年目になりましたが、このマンションに引っ越しして一緒に生活することはまだ3カ月に経ってはありません。話し相手として、彼女が私のことを一番よくわかってくれるわけではありませんが、むしろあまり深く知っていない方だと思います。しかしなぜかこの人に頼んだかという、先ず、今の私の留学の生活の中に、彼女は自分の身近な人物にしながら、将来的にもまだまだ自分と関わっていく人であります。

また彼女は私よりずっと年上で、今年16年目の社会人という社会的な経験積みや学生である私と違って、成熟した考えや価値観を彼女が持っているという理由もあります。働き盛りで、楽しんで勤めているらしいです。朝8時家出て、10時すぎないと戻ってこないという生活パターンを彼女がしています。見た目的にもそうですが、話してすぐ分かったやうぐらいの「心の暑さ」というか熱心を持っている人です。実は私がまだ早稲田の受験勉強をするときや入学するときにもいろいろアドバイスや手伝いをしてくれました。とても忙しい中でも人を助けることが好きな人だと思います。

とはいえ、知り合って長いですし、同じ家に住んでいるのに、お互いに日々忙しくて、互いに時間がずれていて一週間も顔が合わせないのもしばしばあります勉強のことや手続きのこと以外に他のテーマを話したこともないと私が気付きました。自分に過去の、現在の、将来的に精密な関係を持っている人なのに、お互いのことを良く知っていないまま生活進んでしまうという葛藤から、私は今回の私自分自身について書かれたものをぜひこの人に見せ、意見をしてもらう上に、二人の間の距離を近づけるようにし、お互いの理解が深まるようにしたいと思います。

対話活動

1. 冒頭の話

Aさん：みんなテーマこんな風にばらばらだから、まとまらないだろうね。。見みたい。

わたし：そうですね、ディスカッションが全然進まない時もありますよね～

Aさん：今回こうだから、こういうふうに、こういう観点から見て行きましょう、そういうまとめ役の人がいるの？

わたし：あ、意見がばらばらであっても、みんなが結構自由に自分が思っていることを言うですね。しかし、こうだったらどうですかなどを、よくしてくれる大学院生のひとがいます。私も、レポートをあの人に見せて、「もしかしたら、あなたは人間が好きなんじゃない」って言われました。

2. ダンスと現在の私とのかかわり

A さん：うん、なるほど。難しいね～漠然とコメントって言われて～

ええ、先ず思ったのは、トゥちゃんはダンスが好きって始めて知りました。
しかも社交ダンスが好きというのは始めて知りました。ちょっとびっくりしました（笑）
わたし：はい、中学校からやりました。ええ、高校三年生までやって、お母さんに日本に
来て（このとき私の母は日本にいた）って言われて、それでやめました。

A さん：ええ残念ね～

わたし：早稲田の社交ダンス部活に参加しようと思っていたときもあったが、それに参加
するのに服装のお金とか、大会に出るためのお金とか、とてもお金かかりそうで、家族の
経済的な状況から、その考えをやめました。

A さん：お金かかるけど。。

社交ダンスはお金かかるし、だから。。。気軽にできないという、その。「一人でできない」
じゃない。

わたし：そうですね。

A さん：でも数の中で社交ダンスというのは非常に驚きました（笑）トゥちゃんが好きっ
て。

「何でもやりたい、何でも好き」というのにも驚きました。

わたし：やってみて、やめることが多いということです。

A さん：笑

わたし：笑

A さん：じゃ、この社交ダンスは、いろんなことをやっていたけど、好きでずっと続けた
ことだから、ぜひこれからも続けたいだね。お金かからない方法もあるかもしれない。

わたし：うん。日曜日にベトナム人同士のダンスサークルに通っています。先生はいな
いけど、みんなが遊びながら楽しく練習します。だからあまり効果はないですよ～笑

3. ダンスや過去の私とのかかわり

A さん：笑～でも楽しいよね～ 「学校から帰り、友達と話をせず、パソコンもせず、
映画も見ず、すぐ練習室にあわてて行ったという時代もありました」であるんですけど、
これは高校時代？

わたし：はい、そうです

A さん：毎日練習があったの？

わたし：週三回です。高校のとき大学受験勉強はしんどかったけど、それでも週三回長
い時間ダンスの練習をしました。

A さん：ベトナムではトゥちゃんの年齢のひとはダンスをやっているの？

わたし：そのときはあまりいなかったんです。お父さんは好きだから～

A さん：お父さんは好きだったんだ

わたし：うん、それで一緒に練習しに行ったりしました

(しばらく沈黙)

4. ダンスする時の気分や気持ちの深め、意味を見出す

わたし：。。ディスカッションするとき、みんなのテーマについて、話し合いことはおおいですけど。私のテーマってそれはそれで終わりなんで。あさいのかなと思って。。

A さん：いや、決して浅くないと思うよ。広くて抽象的なのはいいテーマとは限られないじゃない。だって、身近なものがいいでしょう。これも、深いなと思って。。

わたし：。。

A さん：練習するとか、見てもらいたいとか、そういうことなく、その全くはじめてのひとつでも、一緒に心強く踊って、楽しくできたらその場で嬉しいでしょう？

わたし；うん

A さん：一期一会だね。社交ダンスをしたことはないから、「えーそういうものなんだ」って思った。そうすると、人が好きとか、そういうものは越えているよね。でも、やったことはない人だと、その二人で一曲を作り上げるのはどういうものかしら、分からないから、じゃ「そうやって人と何にかするのは楽しいんじゃないの」という風になるかもしれないと思った。

実際にやったことはないから、分からないとは言わないまでも。しかもこれは練習するときに、いろんな人に会って、だれとあうかと分からないだよね。

わたし：うん、そうです。

A さん：息があわないとうまくいかないだよね。ジャズセッションみたいな感じだよね。

わたし：うう。。

A さん：決められた通りをやるのもそうかもしれないけど、ちょっとその雰囲気をのり、アドリブが出たりするでしょう？ それがうまくあうと楽しかったりするんだよね。

わたし；確かにそうです。

5. なぜか二人ダンス

A さん：ダンス教室に行ったことはないから、練習風景をちょっと想像できないけどね

わたし：音楽の練習みたいに、基礎練習と自分の好きな曲の練習をします。そのとき先生がいて、「あなたの首はだめだよ」とか「手の動きはこうしなきゃだめだよ」など、角度と姿勢を指導してくれます。

A さん：なるほど、基礎練習だと一人でもできるよね？

わたし：うん、できます。

A さん：でも人と一緒に練習するのが好きだよね？ トウちゃんは

わたし：その方が楽しいですね。

A さん：一人ダンスじゃなくて、なんで社交ダンスがいいと思った？他のダンスにはあんまり興味ない？

わたし：興味ないですよ

A さん：手軽にできない一人のダンスもあるけど。。

わたし；確かに。。。しかし二人だと、安全感もあるし。頼り感もあるし、何となくふたりだと自信を持ってできますけど、一人でじゃできないです、笑

Aさん：笑 一人ができないとなると、だんだん制約があるなとちょっと思った。手軽にというのは決して簡単にという意味ではなく、取り組み安いものの方が細く長く続けられるだよなと思った。人がいないとできない、そういう仲間がいないとできないだもんね～

わたし：そうですね。

Aさん：でも仲間がいるからこそ、楽しいというのはあるよね。一人でやるのと違う、関わりがあるとか、相手が個人的に好きか嫌いかという条件を置いていて、一緒に作り上げられたらすごい喜びがあるよね。逆の場合がある

わたし：あるけど、楽しいの方が多かったです。

Aさん：人と一緒に何かをやるのは好きなんだね？

わたし：笑 そうかな

Aさん：となると、やっぱり一人暮らしはムカムカだったよね 笑い

わたし：笑 そうだ、いやだった。

6. ダンスが人間的に私にとって・結論

Aさん：笑

じゃダンスにはトゥちゃんが好きな様子がいっぱい入っているんだ。
一緒に作り上げたりしたり、調和を楽しめたりするとか、後その最後にある姿勢の美しさとか引き出してくれるし、自分の中の向上心も引きだしてくれるし、そういう意味で、本当に自分が生きていく楽しいとか嬉しいって感じているものの要素が、この社交ダンスに入っているんだね。

わたし：うう、なるほど。

Aさん：というのは、トゥちゃんがこの社交ダンスの要素を、私はこういうような要素が好きっていうのを出せば、好きなものが自然と身の回りに集まるということだ。

わたし：ええ、例えばどんなことですか？

Aさん：例えば、調和。

わたし：調和？

Aさん：調和だったら、アボガド単品がおいしいけど、マグロと生クリームと合わせるともっと美味しいとか～全然違う話だけど 笑 （その日私はアボガドマグロ春巻きを作って一緒に食べました）

わたし：笑 料理すること？ 笑

Aさん：じゃ、食べ物を置いて、昨日のデモもよかったじゃない（前の日に、私は中国のベトナムの領海侵入行為に反対するデモに参加しました）

わたし：疲れました～笑。しかし楽しかった、みんな頑張っているから。

Aさん：うん、デモは一人でやるじゃないし、みんな協力しあって、一つのものに向かっ

てやるから。その向っているものがちょっと政治の問題だったけど、みんなでやるのは楽しかったと思う。

わたし：確かにその通りです。

Aさん：どっかにお友達と一緒に出かけるのが好き？

わたし：うん、もちろん好きです。

Aさん：そうか。人が好きじゃなければ、社交ダンス絶対やらないなと思うよ。

わたし：そうかな

Aさん：トゥちゃんは人が好きか、好きじゃないか今まで考えたことはないだろうな。。常に家族と一緒に生活していたし。

わたし：ええ、そう言われて考えてみたら、初対面の人に触れることに、どっちかという、楽しみにする方です。期待して、積極的に話に参加するほうです。

Aさん：なるほどね～ダンスは中学校からやっていたというのはトゥちゃんにとって、すごい経験だよ。人間関係の面でも。

わたし：考えたことはないけど、そうかもしれないです。何ととっても、私にとって大事なことですけど、ダンスは。

Aさん：人と一緒に作り上げることは楽しい経験をするということは他のことも楽しいと思っているよね、実際ね。

ぜひダンスを続けてください～笑

わたし：はい、ありがとうございます。笑

Aさん：笑

結論

私は留学する時までにずっと家族と一緒に暮らしていて、自分が人、つまり家族以外の他人に接することが好きかどうかということを一切考えたことはなかったです。日本に来てから、もはや家族ではない人、さらに自分と違う文化背景から来た人たちと出会うことが急に増えました。この機会によって、私が家族にずっと精神的に頼っていたことも分かってきました。留學生活の中に、その頼りどころがなくなったので、人間関係がづらいとずっと思いこんでいました。

以上の会話活動により、ダンスに通じて、私は自分の今までの考え方や生き方を掘り下げて考えていました。社交ダンスには、私が好きな要素がいっぱい入っているからこそ、「じゃ、実際の世界に打ち明けられなく、イヤなことがいっぱいあって、もしかしたら私はダンスの中に回避してしまったじゃない」と思いつきました。

しかし、振り替えてみると、昔の自分がダンスに夢中になっていて、やらなければならないことだから～と思って、相手に合わせられるように一生懸命踊っていた記憶がありま

す。よくよく考えてみれば、ダンスがまるで人間関係みたいだと思います。社交ダンスに最も大切にされている二人の間のコネクションを力強くもなく、ゆるくもなく、ネバネバするし、バランスがよくできれば美しいダンスができます。実際の世界にもみんな同じのように、他の人とうまくいきたいという気持ちを持っていて、相手に一生懸命調整しながら生きているわけであります。

ダンスの二人の間のコネクションのように、生活に「和」を最も重視している日本人と毎日接している私は、今までの自分の中の「和」を発見したような気がします。ダンスにはうれしいという気持ちの裏には、照れて、恥ずかしい気持ち、悲しみ気分がその時によってありますが、一旦ダンスを始めると、すべてを一つのうれしいだけを感じられます。その彩りあふれるうれしいとい気持ちで疲れても、つらくなっている、相手と頑張って調和しました。まさしくそのダンスするときにある心の状態を、これからの生活全体の中、に人と振れるときには私は持っていきたい感覚です。

終わりに

わたしは今まで調べてレポートを書くという形のレポートの印象があまりにも強いと感じます。自己アピール以外、自分自身のことについて何かを書くというのは始めてでした。自分のことを深く掘り探し、思いこむというのはひとにはだれでもそうかもしれません。しかし、この活動みたいに、思いこみの段階に留めずに、それを文字にしたり、他の人に相談し意見をもらったり、考えたことがちゃんとした説得力のある文章の流れになるまでの作業の過程は本当に貴い体験だと思います。

実はこのレポートを始めた時に、私はダンス一旦やめていたところでした。振り替えてみると、忙しい生活の中にやらなければならないことが無数で、自分が環境に飲み込まれてしまった気がします。レポートを書くこと自体やそれに関する談話活動が、私は本当に自分にとって何が大事なのか、本当に何をやりたいのかというのを、もう一回自分をじっと考えさせる機械をくれました。それに上記したように、思いこみだけではなく、積極的に他の人の観点から見ることもできました。そうすると自然に自分の考えを論理的に表現できることに近づいた気がします。

またこの際にグループの中いろいろな文化背景から来た人たちに出会えて、普通の差し障りのない話より、もっともっと深いところまで話し合えて、本当に親しみを感じたし、「なるほど、こういう考え方もあるんだ！」という楽しい経験や勉強になりました。グループの友人もできました！

考えるための日本語の活動ありがとう！

動機

私は子どもの頃から外国に興味があった。それは、知らないものを見たい、知りたい、行ってみたいという好奇心からだ。それから今までに少ないながらも外国を訪れる機会があり、いつしか、外国は行ってみたい場所から住みたい場所に変っていた。

しかし、外国ならばどこでも住みたいと思うのかと考えると、どこでも良いというわけではない。ただ、それは国とか地域によるのではなく、私がどれだけその地域の人々に受け入れられていると感じられるかによるのではないかと思った。つまり、私が住みたいと考える場所は、周りの人々と良好な人間関係があり、自分が認められている場所なのではないか。

それでは、なぜ外国なのか。私が生まれ育ったのは、小さな地方都市だが、私の住んでいた地域には昔から住んでいる人が多く、その地域の人ことはみんなが知っているという感じの場所だった。そのため、子どもの頃から、隣近所の人から私自身がいろいろ言われることもあったし、人のうわさ話もよく聞いた。そのことがすごく嫌だった。人の外見や外から見える行動だけでその人を判断してとやかく言う人が多いと思った。とにかくそこから抜け出したかった。

もう一つ考えられる理由は、自分で決めて行動できない自分自身にある。学校では「やってはいけない」と決められたことがあり、なぜそれをやってはいけないのかはわからない。でも、やると怒られる。私の学校生活はずっとそうだった。だから、何をするにしても、私がやりたいとかやりたくないは関係なく、学校のきまりだからとか先生に怒られるからが判断の基準になっていった。これは友達や周囲の人との関係にも影響を及ぼしている。自分自身がいいとか悪いとか、やりたいとかやりたくないとか判断する前に、必ず人はそのことをどう思っているのかをつい気にしてしまう。だから、本当にそれがやりたいのかやりたくないのかだんだんわからなくなってしまう。人のことを考えるのは良いことだとは思いますが、いきすぎると自分を失ってしまう。

これらのことを考えると、私は外国に住みたいのではなく、私自身が決めて行動することができる、そしてそれが周りに受け入れられる、そんな場所に住みたいのだ。つまり、国とか地域とかは関係なく、私が私らしくいられる場所である。そのように考えると、ここはダメだから別の場所、というように、場所を捜し求めるのではなく、私が今いる場所を、いかにして私自身で「私らしくいられる場所」にしていくかが大切なのではないかと思った。

それでは、「私らしくいられる場所」とはどのような場所なのだろうか。そもそも「私らしい」とはどのようなことなのか。「私」はどんな人なのか判断する時、それはいつも他者が関わっている。私自身が「私」のことを思う時も、相手が誰かによって「私」が変わる。

そして、誰かが「私」のことを判断する時も、その人と「私」の関係の中で判断される。だから、人によって私自身の態度も変わるし、周りの人もそれぞれに「私」への判断が違う。それでは、本当に「私らしい」とはどのようなことを言うのだろうか。

対話

対話相手の Sさんは、今私と同じ日本語教育研究科で学んでいる。共に日本語教育の発展のため、自分にできることは何かと考えている仲間である。そして、先学期から同じ授業を受ける中で、私は Sさんに対し、私とは違う行動をする人、例えば、自ら率先して行動を起こす人、自分の思ったことを思わず口にする人、人のために自分が何ができるかということを常に考えている人、という印象を持っていた。私にはできないことばかりなので、どうしてできるんだろう？と疑問を持っていた。そして、機会があれば、どうして？と尋ねたりしていた。私にとっては、彼女は、常に「自分らしく」いられる人なのではないかと思った。そこで、そんな表面的に違う行動を取りがちな彼女と対話がしてみたいと思った。私が彼女に対して「どうして？」と思うように彼女も私に対して「どうして？」と思っているのではないか。それを聞き、自らを振り返ることで、自分がどうしてそう考えるのかがわかるかもしれないと思った。

拒否されることへの恐怖

S：何に嫌だと思ってたんだっけ？

T：何で私は言わないだろうって思ったら、きっと、言ったことによって、何か人に言われるのが嫌。

S：言い返されるのが嫌ってこと？

T：ううん。みんなが同意っていうか、同意しないまでも、悪意を表明されるのが嫌？

S：それってどうなの？って言われるのが嫌なの？

T：うん、何言ってるの？みたいなことを言われるのが嫌。

S：ってことは、何か言うことによってその相手にある高井さんの像を壊されるのが嫌ってことね

T：うん、そうかもね。

S：自分の評価につながるよね。相手から言われたこと、フィードバックが、高井さんの評価につながってしまう。で、それがマイナスであることが嫌だ。

T：確かに

私は、人から批判されたり拒否されたりすることがすごく嫌だ。しかし、考えてみれば好きな人はいないはずだ。ここでは Sさんが、私が自分への他人の評価がマイナスであることが嫌だと言っているが、確かにそうだ。私は人からのマイナスの評価を受け止めることができない。それはつまり私が自分に自信がないからだろうと思った。自分が自信を持

って判断し行なったことや言ったことなら、それに対してマイナスの評価をされても、きちんと受け止めることができるのではないかと思った。

判断基準

T：一番最初に決めるのはやめようって思ったんだよね。そこそこ様子を見て、決めよう。って思ったかな。だから何か、すべてがそんな感じなんだよね。

S：様子を見て決めよう。だから、高井さんの判断基準っていうのはそこなんだよね。様子を見て決める？自分じゃないんだよ。

T：うん、自分がやりたいとかやりたくないとか、そこじゃなくて、みんながどうするか見て、多分、歩調を合わせるっていうか、

S：みんなの出方とか、位置を見て、そこと私の位置を考えるんだ。

T：基本的に、人からどう見られてるかとか、そういうのがものすごい気になるから、きっと何についてもそうなんだよね。何かする時とか、何か判断するときもそうなってるってことだよ。私がしたいかどうかじゃなくて、例えば、この場でこれをやるのは大丈夫なのかとか、ここにいる人たちはみんなこれをやるのだろうかとか、とりあえずちょっとこれやりたいなって思った時に、みんなやるのかなあとか、誰もやらないんだったら、やりたいけど我慢しようかなとか、そういうことは良くあるかも。

S：そうなんだね。だからやっぱり

T：だから、やっぱり私はそれが嫌なんだよね。私はやりたいことやりたいんだよ。

自分に自信がないから自分を主張できない、そして周りに合わせる。このことは、もちろん主張して反対された時に気持ちが落ち込んだりすることが嫌だからということもあるが、本当は責任を回避しているのではないかと思った。私は私のやりたいことをやりたいと言いながら、自分のやりたいことをやるからには責任を負わなければならない、実はそのことが嫌なのだと気づいた。

人は人、自分は自分、は自立すること？

T：人からどう見られているかが、嫌。それを気にするのが、嫌。

S：人から自分がどう見られてるのかってことだよ。そんな私は別に思っていないよ。

T：そうなんだよ。それはね、すごい昔からよく言われて、

S：でしょ？

T：中学の担任の先生にも、自意識過剰だって言われて、すごいわかるんだよ、頭では。そうそう、誰も私のことなんて見てないよって。わかるんだけど、気になっちゃうんだもんって思って、そんな自分がすごく嫌で

S：それは何なんだろう？

T：私本当に、振り返って、授業でも、やってみて、それでも心が辛かったら、やめればいい

いじゃないですか、みたいなことを言われて、思い出したのは、高校生の頃とか、すごく嫌で、そんな自分が、それですごく自分が変わろう変わろうって思ったの。で、多分、大学生の頃とか、20代前半の頃とか、結構気にしてなかったんだよね。悪く言えば、単なる自分勝手な人間だったと思うんだけど、だから、そんな時期もあったなって思ったんだよね。

S：それから、それで終わっちゃったの？

T：でも、私は、ちょっと思ったのは、やっぱり、私が履き違えてたっていうか、人のことが気になるのがすごく嫌だ、だから、私は自己完結しようって思ったんだよね、きっと。だから、人が私のことをどう思おうと関係ないって思おうとした。でも、それは別に悪いことじゃなかったのに、だから関係ない、私は何をやってもいい、人のことは気にしない、って思うから、結構、和を乱す人間になるっていうか。

S：やっぱり過去にヒントがあるんだね。

T：ちょっとした自立を履き違えてたのかな。

S：ここが、本当に自分だけになっちゃったんだよね。

T：何か、一人でやるのが格好いいっていうか、人に惑わされない、ことがすごいことだ。って思ってた気がする。

10代後半から20代前半の頃、人のことが気になって自分のしたいことができないことをすごく嫌だと思っていた。だから、私は人のことは気にせず自分のしたいことをできるようになりたいと願って努力した。また、一人で何でもできる人は自立した格好の良い人だと思った。それは、本来は、自分の言動に責任を持ち、自分の判断で行動することだったのだろうが、当時の私は、周りの人のことを考えず、周りの人の好意が見えず、ただ自分勝手に行動していた。自分勝手と自立を履き違えていた。

集団に属すること

S：集団に属するっていうこととか、属してる自分っていうのがどういうことなのか、っていうこともすごい関係してるんじゃない？だから、その対策として目立ちたくないとか、様子を伺うとか、そういう行動に出てるんでしょ？

T：私ずっと集団に属したくなかったんだと思う。なぜかと言うと、そうやって人のこと伺わなきゃいけないから、すごく嫌だったんだよ。だけど、今、何か、集団に属するってすごいいいなって思ってるんだよね。今まで、思ったことなかったと思う。自分で何でもできるって思ってるっていうか、人の助けがあってどれだけ助かるかってことがわかんないんだよね。だから、言葉って理解してるけど、体感するって本当にすごいなって思って、協働とかも、理解できるじゃん、本とか読めば。そうだよ、すごいよね、ってずっと思ってたけど、でも、心のどこかで、私人とそういうことするの結構苦手じゃん、っていうか、そういうこといろいろ考えるのが嫌なのよ。やっぱり位置付けみた

いな？

S: それ以外のことでしょ？

T: そうそう、やることっていうよりも、このグループで何かをやらなきゃいけないっていうことが、そのこと自体が私にとっては嫌なことだったのよ、ずっと。

S: でも、それ変わるかもしれないよね。中身が大事っていう

T: だから、それは振り返ったっていうか、そうだったなって思って、今、すごく人様がありがたいって思って、すごいなって思って、すごい実感っていうか、だから、やっぱりね、私が教師として協働とか言うんだったら、今までの私だったらだめだったんだろうなって思う。

今までの私は、集団に属することは、自分を殺し、人に合わせ「なければならない」ことで、苦痛だった。自分一人でやった方が自分の好きにできるし、誰にも文句は言われな
い。そして私は自分一人でできると思っていたし、自分一人でやることはいいことだと思
っていた。しかし、今私は日本語教育研究科でいろんな人と一緒に悩み、考え、話をし、
そのことにすごく助けられていることを実感している。世の中には自分一人で解決できな
くても誰かと一緒に解決できることがたくさんあることに気づいた。今でも人間関係は
難しいし煩わしいとは思ってはいるが、それが人間であり社会なのだと思う。それを否
定しては生きていけない。人間関係を否定することで、私は今までどれだけ周りの人の好
意を無にし、もしかしたら人を傷つけていたのかもしれないと思う。それに気づいた今、
煩わしいだけの人間関係への見方が変わり、いかに周りの人と関わっていくかを考えるよ
うになった。

結論

私は、Sさんとの対話や授業でのディスカッションを通して、今までの自分の周りの人との
関わり方を振り返った。このテーマを選んだ動機でも書いたように、私は私のことを良
く知らない周りの人に、私のことを外から見ただけで判断され、評価されるのが嫌だった。
そして、おそらくそのことから、周りの人の目を気にして、自分自身でいろいろな物事を
判断することができなかった。そしてそんな自分が嫌だった。そのため、私は「周りの人
の言うことは気にしない、自分で判断して自分のしたいことをする」ことができる人間に
なりたかった。その時の私にとって、集団とは、「一人では何もできないくせに集団になっ
て人を批判する」というイメージであり、私はそんな人間にはなりたくないし、そんな集
団には属したくないと考えていた。そして、そんな集団からは自立した、自分で決めて自
分で何でもできる人間になりたかった。しかし、そもそも表面上の私で私を全て判断され
ることや周りの目が気になるというのは、私に自信がなかったからだということに気づい
た。そして、あまり良いイメージのない集団に属したくないと思って私がとっていた行動
は、結局は逃げや責任回避であり、自立とは程遠いものであった。

私は今、日本語教育研究科で学んでいる。そして、今は集団に属していることをとても幸せに感じている。それはなぜか？自分の研究のことを考えている時、自分一人で本を読み、勉強し、考えること、これはもちろん大事なことであるが、自分一人ではどうしようもないことがある。そんな時に周りの人と話すこと、一緒に考えること、アドバイスをもらうこと、そこから一人では見つけられなかった解決策を見つけることができるということに気づいたからだ。そして、共に話し、考え、解決策を見いだそうとする仲間の中では、以前感じていたような自分を評価されるという感覚はあまりなく、人の目を気にして自分の思ったことが言えなかったりできなかったりということもあまりない。お互いに自分の考えを相手に伝え、そのことについて議論することができる。つまり、お互いが相手を認め合い、お互いにある一つの問題を解決しようとしているからだと思った。

それでは私が「私らしくいられる場所」とはどういうことなのか。そもそも「私らしい」はある決まった型ではない。私が所属する共同体の中での人との関係性の中で表れる私は全て私なのである。ただそれを居心地が良いと感じるかどうかなのではないか。その居心地の良さの要因は、お互いの理解や認め合うことや、それに伴い自分に自信が持てることや自分の責任を果たすことなのではないだろうか。それらの相互作用でその場は私にとって居心地の良い場所になる。

その居心地の良い場所はどうやって見つけるのか、どうやって作っていくのか。まず、自分の自信が持てるように努力すること。一生懸命がんばったことは結果はどうであれ自信が持てるはずである。そして、その共同体の中で自分の責任を果たすこと。更に、理解し合ったり認め合ったりするためには、話をするのである。自分の思っていることはきちんと表現し伝えなければ伝わらないし、相手の考えていることもきちんと聞かなければわからない。様々な相手と対した時、そこには自分の考えていることを表現したくない人もいるかもしれないし、私はきちんと表現したつもりでも、理解してくれない人もいるかもしれない。しかし、私自身は、その共同体の中で私が私らしくいられる、居心地良くいられるために、自分のことを相手に伝えるように表現することが必要であり、相手の表現をきちんと聞き、理解することが必要である。

おわりに

私にとって、このグループでのディスカッションを通して自分の過去・現在・未来を結ぶテーマを発見するという活動はどういう意味があったのだろうかと考え、この活動自体が、私のテーマそのものだったという気がしてならない。つまり、私のこのグループディスカッションへの参加は、私が私らしくいられる場所を自然に作っており、この場が、私が求めていた私らしくいられる場になっていたのではないかということである。結論に書いたように、私が私らしくいられるためには、まず、第一に自分に自信が持てるように努力し、責任を果たすことであり、第二にその場の人びとと話をする、つまり自分のことを相手に伝えるように表現し、相手の表現をきちんと聞き理解することで人間関係を

構築していくことである。この活動の中で、私は、自分のテーマを発見したいという気持ちとグループみんなが自分のテーマを発見して欲しいという気持ちから、その場を作るために努力をしてきたつもりであるし、自分なりの責任を果たす努力もし、活動に積極的に関わってきたつもりである。そして、ディスカッションする中で、自分のことをみんなに理解してもらいたいから自分のことを表現し、みんなのことを理解したいからみんなのことをきちんと聞いてきた。そして、この場では、みんなが私のことをどう思っているか、気にならないとは言えないが、私は私なりにできることをしているということが多少の自信につながり、それほど気にならなかったのではないかと思った。こういうことが私が求めていた私らしくいられる場所であり、このようにすればそれが実現できるのだと感じた。この活動を通して、私のテーマである「私が私らしくいられる場所」のための人との関わり方や共同体への参加の仕方を学んだ気がする。



あとがき

自己発見から幸せな人生に向き合う

毎日の朝、鏡で自分の顔を見る。これ以上よく知っている顔はないに間違いない。しかし、映っているのは確かに自分なのに一瞬別人に見えたこともある。もしかしたら鏡の中の自分をよく知っていると当たり前に思っているが、本当は真実の自分への理解は足りないという質問が頭の中で繰り返している。確かに、自己というものはいつでもきちんと見える形で存在するはずだと信じて疑わなかったが、その見える自己に関する「なぜ？」を問うと、たとえば今まで自分の選択した道、これから歩みたい道に関する理由や動機は何だと聞かれたら、自分のことなのに、なんだかうまく説明ができない人が多いだろう。

これはいわゆる自己発見ということだ。人生は一回しかないから、心の中に秘めている本当の幸せ——人生のモチベーションや意義をちゃんと把握することはぜひぶん重要だと考えられる。しかし、多忙な日常生活の中でそれを忘れてしまった人が多い。これを実践するチャンスはまさしく「考えるための日本語」という授業の最大の意義だと思っている。どうしてうちのグループは「大福」というネームを選んだかという、やはり 13 週間のグループディスカッションと対話活動を通して、みんなそれぞれ自分の人生におけるモチベーションや意義を深く掘り下げることで、知らなかった自分の真実を覗くことができ、大きな幸せにつなげる人生の道がわかったからである。同じ人間でも、自分の過去・現在・未来にかかわるテーマは一つではない。しかし、テーマをいくつ選んだとしても、それと自分を結びつけるものは何かを考えた時、結局は同じ一つの根にたどり着くことになって、それは自分の潜在意識に深くかかわる自己の真実だと考えられる。それはまさしく一生をかけて追求している自分なりの「幸せ」だということである。その「幸せ」をちゃんと把握すると、将来は何をするかどんな選択をするかというようなことははっきりわかっていたら、悩んだり後悔したりすることなく望んだどおりの人生を送ることが確実にできると考えられる。しかし、そのような自己発見は一人ではできない。グループ活動を通して他人の立場に立って、他人の希望・発想・悩みを体感し、回りの人とのつながり考え、自分の過去を振り返り、現在を分析し、未来を展望することで自分なりの幸せをみつけられるだろう。自己発見によって狭くて暗い部屋に閉じこもっているような方向性のみつけられない自分から迷わない自分へ転換し、自己発見から幸せになるために人生に向き合おうというのはこの活動の意義であって私たちの結論でもある。

(李天智)

